

Title	日本経済史の始り：日本史の科学的研究問題に関する一批評
Sub Title	
Author	山本, 勝太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1929
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.23, No.3 (1929. 3) ,p.462(130)- 473(141)
JaLC DOI	10.14991/001.19290301-0130
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19290301-0130

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本經濟史の始り

——日本史の科學的研究問題に關する一批評——

山本 勝太郎

近頃、日本史の科學的研究が愈々盛になつて來たやうである。そしてその結果、中には大化改新以前の日本歴史は之を單なる傳説神話なりとして、その科學的説明の範圍から除外してしまはうとする人さへある位である。之は併し、尤もの様なやり方で而も尤もでない。といふ譯は、大化改新を認めやうとするならば、聖德太子の事跡も認めねばならぬであらうし、而して又その前後に於ける史的關係も肯定しなくてはならなくなる。然るにその前後をどの程度まで認め得べきかを限定する事は甚だ困難である。『古事記』の推古天皇朝までの記述を傳説とし、それ以後を日本書紀に依つて認めむとするか、これ書紀を以て古事記修飾の文書也とする説を確實に否定し得べき資料を舉證せらるゝに非んば却つて公平なる議論の立場を失することになるであらうし、又大寶令養老律令以後の社會に於て初めて史實を肯定せんとすれば、大化改新肯定説はそこに自然と矛盾を來さなければならぬ。此の故に、私は、假令傳説神話であるにせよ、大化改新を認める以上は、同じくその推考を溯らせて、その傳説神話として傳へ殘されたる太古神代の日本史をも一應吟味してみることは、日本史の科學的説明をなさむとするに當つて敢て差支なきことであるのみか、寧ろ缺くことを許さるまじきものであらうと思ふ。たゞ問題は、それらの記述が奈邊まで事實に近かりしかといふことである。併し乍ら、その點に就ては、今日十分なる證明を行ふ事は出來ない。而も近からずとする反證を擧げる事も出來ないのである。従つてわれらは、そこに書き記されたる文字を其儘に解釋してゆくより外に仕方が無いのである。

『古事記』上卷は次の文章を以て書き出されてゐる。

天地の初發の時、高天の原に、成り坐せる神の御名は、天之御中主神。次に、高御産巢日神。次に、神産巢日神。此の三柱の神は、並、獨神成り坐して、御身を隠し給ひき。次に、國稚く、浮脂の如くして、海月如す漂へる時に、葦牙の如、萌え騰る物に因りて、成り坐せる神の御名は、宇麻志阿斯訶備比古遲神。次に、天之常立神。此の二柱の神も、獨神成り坐して、御身を隠し給ひき。

上の件、五柱の神は、別天神。

次に、成り坐せる神の御名は、國之常立神。次に、豐雲野神。此の二柱の神も、獨神成り坐して、御身を隠し給ひき。次に成り坐せる神の御名は、宇比地邇神。次に、妹、須比智邇神。次に、角杵神。次に、妹、活杵神。次に、意富斗能地神。次に、妹、意富斗乃辨神。次に、淤每陀琉神。次に、妹、阿夜訶志古泥神。次に、伊邪那岐神。次に、妹、伊邪那美神。

上の件、國之常立神より以下、伊邪那美神以前、并せて、神世七代と稱す。(上の二柱は、獨神、各、一代と云す。次に、雙び坐す十神は、各、二神を合せて、一代と云す。)

是れ今を去ること千二百有餘年以前の和銅五年に於ける記述である。而も天地混冥の創世期の状態を敘して、漸く人間創造の世界に及ぶ。而も今日の科學が説く處の天地創造の理と聊かも異なるなきは實に驚嘆に値するものにして、如何にして斯くの如きが當時の傳説の中に述べ來られしや、多大の疑問を挿むべきと同時に、大いなる興味の繋る點であらう。

さて、古事記はさらにその次に次の如く敘して居る。

於是、天神諸の詔命以ちて、伊邪那岐命、伊邪那美命、二柱の神に、「是の漂へる國を、修理國成せ」と、詔りごちて、天の沼矛を賜ひて、言依し給ひき。故、二柱の神、天の浮橋に立して、其の沼矛を指下して、晝き給へば、鹽、許袁呂許袁呂に晝き鳴して、引き上げ給ふ時に、其の矛の末より、垂落る鹽、果積りて、島と成る。是、淤能碁呂島なり。其の島に、天降り坐して、天の御柱を見立て、八尋殿を見立て給ひき。

茲に至つて、日本史はまづ最初に八尋殿を描く。即ち住を定む。而して未だ食物及び衣服に就ては何ら述べてない。男女を描き、居處を描く。さらに敘するものは何ぞ。古事記は次に次の如く載せてゐる。

於是、其の妹、伊邪那美命に、「汝が身は、如何に成れる」と、問ひ給へば、「吾が身は、成り成りて、成り合はざる處、一處在り」と、答曰し給ひき。伊邪那岐命、詔り給ひつらく、「我が身は、成り成りて、成り餘れる處、一處在り。故、此の吾が身の、成り餘れる處を、汝が身の成り合はざる處に、刺し塞ぎて、國土生み成さむと思ふは奈何」と、詔り給へば、伊邪那美命、「然、善けむ」と、答曰し給ひき。爾に、伊邪那岐命、「然らば、吾と、汝と、是の天の御柱を行き廻り逢へて、美斗能麻具波比爲な」と、詔り給ひき。如此、云ひ期りて、乃ち「汝は、右より廻り逢へ。我は左より廻り逢はむ」と、詔り給ひ、約り竟へて、廻ります時に、伊邪那美命、先「阿那邇夜志、愛袁登古袁」と言り給ひ、後に、伊邪那岐命、「阿那邇夜志、愛袁登古袁」と言り給ひき。各、言り給ひ竟へて後に、其の妹に、「女人を、言先だちて良はず」と、曰り給ひき、然れども、久美度に興して、御子、水蛭子を生み給ひき。此の御子は、葦船に入れて、流し去てつ。次に淡島を生み給ひき。是も、御子の例には入らず。

此れを日本書紀に就て按ずるに、

伊弉諾尊。伊弉册尊。立於天浮橋之上。共計曰。底下豈無國歟。迺以天之瓊瓊玉也。矛指下而探之。是獲滄溟。其矛鋒滴瀝之潮。凝成一島。名之曰。碓敷盧島。二神於是降居。彼島。因欲共爲夫婦。產生洲國。便以碓敷盧島爲國中之一柱。而陽神左旋。陰神右旋。分巡國柱。同會一面。時陰神先唱曰。意哉。遇可美少男焉。少男。此云。陽神不悅曰。吾是男子。理當先唱。如何婦人反先言乎。事既不詳。宜以改旋。於是二神却更相遇。是行也。陽神先唱曰。意哉。可美少女焉。少女。此云。因問陰神曰。汝身有何成耶。對曰。吾身有一。雌元之處。陽神曰。吾身亦有。雌元之處。思欲以吾身元處。合汝身之元處。於是陰陽始造合爲夫婦。及至產時。先以淡路

洲爲胞。意所不快。故名之曰淡路洲。迺生大日本豐秋津洲。次生伊豫二名洲。次生筑紫洲。次雙生隱岐洲與佐度洲。世人或有雙生者象此也。次生越洲。次生太洲。次生吉備子洲。由是始起大八洲國之號焉。即對島臺岐島及處々小島。皆是潮沫凝成者矣。亦曰水沫凝而成也。

一書曰。陰神先唱曰。美哉善少男。時以陰神先言故爲不祥。更復改巡。則陽神先唱曰。美哉善少女。遂將合交而不知其術。時有鵝鴿。飛來搖其首尾。二神見而學之。即得交道。是れ即ち男女相姦の始りである。即ち古事記の示すところ、男女互に分れてより最初に現れしものは、結婚である。而もかくの如く、戀愛による自由結婚である。自然のまゝなる肉慾本能の描寫である。かくして日本史は、その最初の記事に於て、人間の本能慾としてまつ sex-instinct を認めてゐるのである。

この性本能は、それよりして遂に『古事記』並に『日本書紀』を通して、原始社會人の戀愛生活の單純性を説き、彼等の生活を如實に描寫せしむるものとなるに至れるが、就中、夙に注視せらるべきは、かの天の岩戸の大神樂として傳れる、史上に有名なる物語の記事に就てである。今之に關して記紀を按ずれば、まづ記は

爾に、速須佐之男命、天照大御神に白し給はく。「我が心、清明き故に、我が生めりし御子、手弱女を得つ。此に因りて言さば、自ら我勝ちぬ。」と云ひて、勝荒に天照大御神の營田の畔離ち、溝埋め、亦其の夫嘗聞看す殿に尿放り散じき。故、然爲れども、天照大御神は、咎めずして告り給はく。「屎如すは酔て吐き散すことこそ、我が汝兄の命、如此爲つらめ。又田の畔離ち溝埋むるは、地を惜しとこそ、我が汝兄の命、此如爲つらめ」と詔り直し給へども、猶其の惡しき態、止まずて轉あり。

天照大御神。忌服屋に坐しまして、神御衣織らしめ給ふ時に、其の服屋の頂を穿ちて、天の斑馬を逆剝に剝ぎて、墮し入る時に、天の衣織女、見驚きて、梭に陰上を衝きて死せにき。

故、於是、天照大御神、見畏みて、天の石屋戸を閉て、刺し籠り坐しまして。爾ち、高天の原、皆、暗く、葦原中國、悉に、闇し。此に因りて、常夜往く。於是、萬の神の聲は、狹蠅那須、皆、満ち、萬の妖、悉に發りき。

是を以て、八百萬の神、天安の河原に、神集ひ集ひて、高御産巢日神の御子、思金神に思はしめて、常世の長鳴鳥を集へて、鳴かして、天安の河上に、天堅石を取り、天の金山の鐵を取りて、鍛人、天津麻羅を求きて、伊斯許理度賣命に科せて、鏡を作らしめ、玉祖命に科せて、八尺勾珠の五百津の御統の珠を作らしめて、天兒屋命、布刀玉命を召びて、天の香山の、眞男鹿の肩を内抜に抜きて、天の香山の、天波波迦を取りて、占へ擬なはしめて、天の香山の、五百津眞賢木を根掘に掘じて、上枝は、八尺勾瓊の、五百津の御統の玉を取り著け、中枝に八尺鏡を取り繫け、下枝に、白幣束、青幣束を取り垂で、此の種々の物は、布刀玉命、太御幣と取り持して、天兒屋命、太祝詞禱ぎ白して、天手力男神。御戸の掖に隠り立して、天宇受賣命、天香山の天の

日影を手次に繋けて、天の眞拆を鬘と爲て、天香山の小竹葉を手草に結びて、天の石屋戸に、汗氣伏せて、蹈み轟こし、神懸爲て、胸乳を掛き出で、裳緒を、陰に忍し垂れき。爾、高天の原動りて、八百萬の神、共に咲ひさ。

於是、天照大神、怪と以爲して、天の石屋戸を細に開きて、内より告り給へるは、「吾が隠り坐すは因りて、天の原、自ら、闇く、葦原中國も、皆闇けむと思ふを、何由て、天宇受賣は、音楽し亦、八百萬の神、諸、咲ふぞ」と、詔り給ひさ。爾に、天宇受賣、「汝が命に、益りて、貴き神、坐すが故は、歡喜咲樂ぶ」と言しき。斯く言す間に、天兒屋命、布刀玉命、其の鏡を指し出で、天照大神に示せ奉る時に、天照大神、逾、奇と思して、稍、戸より出で臨み坐す時は、其の隠り立てる、天手力男神、其の御手を取りて、引き出し奉りさ。即ち、布刀玉命、注連繩を、其の御後方に控き渡して、「此より内に、勿、還り入りましそ」と言しき。故天照大神、曲で坐せる時は、高天の原も、葦原中國も、自ら、照り明りさ。

さて、原始社會に於ける赤裸々なる性的生活の態様を遺憾なく描出してゐるのである。然るに、この有名なる物語に就て、單にかくの如き性本能の敘述せられたる光景以外、さらにはれらにとつて看過し得ざる點は、そこに同時に物慾本能の描寫が鋭く描かれてゐることである。即ち性慾本能と同時に、夙に物慾本能が肯定せられてゐることである。

といふのは、前記拔萃の文中「是以八百萬神。於天安之河原。神集集而。高御産巢日神之子思金神。命思而。集常世長鳴鳥。命鳴而。取天安河之河上之天堅石。取天金山之鐵而。求鐵人天

津麻羅而。科伊許理度賣命。命作鏡。科玉祖命。命作八尺勾璣之五百津之御須麻流之珠而。召天兒屋命布刀玉命而。内拔天香山之眞男鹿之肩。拔而。取天香山之天波波迦而。命占合麻迦那波而。天香山之五百津眞寶木矣。根許士爾許士而。於上枝。取著八尺勾璣之五百津之御須麻流之玉。於中枝。取繫八尺鏡。於下枝。取垂白丹寸手青丹寸手而。云々といふ鏡、玉、布等の幣物は、實は上代社會に於ける『貨幣』に外ならないのである。

之までの著書の中には、彼の和同開珍の發行を以てわが國に貨幣經濟が始つたなど、途方もない事を書いてゐるものもある様であるが、實際わが國に於て貨幣經濟が發達したのは徳川時代に入つてから後の事で、それまではたゞ貨幣の流通が漸次普及してきたといふだけの事であつて、『貨幣經濟』などは行はれてはゐなかつたのである。而も和同開珍の發行以後に於てさへ——例へば奈良朝時代を通じてさへ、それら金屬貨幣による交換よりも、寧ろ他の財貨、例へば稻とか布帛といつたやうなものを交換支拂の資料として用ふる場合が多かつたのであつて、稻帛の類は、實にわが上古に於ける『貨幣』の職分を果したる尤なるものであつたのである。(此の點に關する詳細は『三田學會雜誌』第二十二卷第三號所載拙稿に就て參考せられたし)然るに、稻帛のみが主として所謂『貨幣』としての職分を盡せる時代、並にそれ以前の社會に於ては、或は獸皮とか、武器馬匹、農具の類も何れも『貨幣』として用ゐられてゐたもので、私は之に就て前記拙稿の中でも「市に於ける財貨交換の方法は、その初めは、固より交換當事者間の直接交換にて、而も交換すべき物と物とのとりや

りであつたものと思はれるが、やがてこの交換の形式は進歩して、茲に貨幣なる一種の交換媒介物を生じ、之によつて直を量つて財貨の授受が行はれるやうになつたのである。併し乍ら、はじめはことさらに一定の財貨を以て貨幣の職分を行はしめむと欲したるには非ず、又その必要もなかりしかば、種々なるものが今日に謂ふ所の貨幣の代用を爲したる如く、古文献に徴すれば、或は朝廷貴族の間などには曲玉や鏡や刀劍の如きものが貨幣に代りて珍重せられ、後には、例へば雄略天皇紀十三年の「狹穂彦玄孫齒田根命。竊奸采女山邊小島子。天皇聞。以齒田根命。收付於物部目大連。而使責讓齒田根命。以馬八匹太刀一口。祓除罪過。」云云以下、大化二年の詔勅の一節、天武紀五年の一節等を引いて、以て夫らのものが、事實上「貨幣」に代用せられてゐた事例を擧げておいたのである。

而して更に、古事記上卷や、日本書紀神代紀に於て「貨幣」に相當するものは、それら諸種の玉、劍、鏡の類である。従つてこの天岩戸前の大神樂に際して、布刀玉命が、「此の種々の物」と「太御幣」と取り持たして「云々といへるは、今日の意味に於て、「金貨銀貨を積んで」といふことになる。金銀財寶を飾り立て、言葉を換へていふならば、人間の物質慾を充すことの手段を講じて云々といふのである。即ちこの記事は、所謂神代と呼ばれたる遠き原始社會人の物質本能と性慾本能との兩方面の説明を以てしてゐる所のものである。

紀に曰。
是時天照大神驚動。以梭傷身。由是發憤。乃入于天石窟。閉磐戶而幽居焉。故六合之内常

闇而不見。晝夜之相代。于時八十萬神會合於天安河邊。計其可禱之方。故思兼神深謀遠慮。遂聚常世之長鳴鳥。使互長鳴。亦以手力雄神。立磐戶之側。而中臣連遠祖天兒屋根命。忌部遠祖太玉命。掘天香山之五百箇眞坂樹。而上枝懸八坂瓊之五百箇御統。中枝懸八咫鏡。一云眞下枝懸青和幣。和幣此云。自和幣相與致其所禱焉。又猿女君遠祖天鈿女命。則手持茅繩之稍。立於天石窟之前。巧伊優。亦以天香山之眞坂樹爲鬘。以蘿爲手繩。而火處燒。覆槽置。顯神明之憑談。(下略)

一書曰。日神尊以天垣田爲御田。時素戔鳴尊。春則填渠。毀畔。又秋穀已成。則冒以絡繩。且日神居織殿時。則生剝斑駒。納其殿內。凡此諸事盡是無狀。雖然日神恩親之意。不愠不恨。皆以平心容焉。及至日神常新嘗之時。素戔鳴尊則於新宮御席之下。陰自送糞。日神不知。徑坐席上。由是日神舉體不平。故以恚恨。迺居于天石窟。閉其磐戶。于時諸神憂之。乃使鏡作部遠祖天糖戶者。造鏡。忌部遠祖太玉者。造幣。玉作部遠祖豐玉者。造玉。又使山雷者。採五百箇眞坂樹八十五玉鏡。野槌者採五百箇野薦八十五玉鏡。凡此諸物皆來聚集。時中臣遠祖天兒屋命。則以神祝祝之。於是日神方開磐戶而出焉。是時以鏡入其石窟者。觸戶小瑕。其瑕於今猶存。此即伊勢崇祕之大神也。已而科罪於素戔鳴尊。而責其稜具。是以有手端吉棄物。足端凶棄物。亦以唾爲白和幣。以痰爲青和幣。用此解除竟。遂以神逐之理逐之。

然るに此の鏡は、後に日子番能邇邇藝命に下されしものにて、記に「於是、其の招ぎし、八尺の勾璣、鏡、及草那藝劍、亦常世思金神、手力男神、天石門別神を副へ賜ひて、詔へらくは、此の鏡は、事、我が御魂として、吾が御前を拜くが如、齋き奉り給へ」云々といへば、之は一方祖神崇拜の後世習俗の濫觴をなすと共に、他方財産相續の根源とも見るべく、後世、かの券を以てし、或は朱印墨附を以てせられたる財産讓渡、若くは財貨委讓の場合と同形式なりと見做さるべきであらう。又家寶繼承による相續權の發生とも見らるべきであらう。即ち上代社會に於て、鏡を贈り、劍を贈り、又玉を贈れるは、實に「權利と富」との二つを讓渡する形式にして、その鏡、劍、玉の讓渡によつて、それに附隨する凡ての權利と財貨とが同時に委讓せらるゝわけである。(但單に財貨として支拂はるゝ前掲引用の例の如き場合、或は單純なる贈與の形式を以てせる場合と混同してはならない)

今日、かの妖禍退散、善福祈願のためにする御祓に際して用ゐらるゝ所謂御幣なるものも、神前神の上に飾る紙製の御幣も、凡て此の天岩戸大神樂の際に用ゐられたる幣物奉仕の遺風にして、而もこの「種々の幣物」即ち御幣が、上代社會に於ける「富」若しくは「貨幣」の形態にして、貨幣の洗禮によつて妖禍を退散せしめ、幸運萬福を願はむと欲するところ、恰も前掲記の文に見る如き妖魔跳梁の暗黒世界轉じて再び明き世となれる有様と相似たるを知るべく、依是觀之、畢竟人間生活の歴史は、何れの時代、何れの社會を問はず、凡て色慾本能と物慾本能の描寫より成れるものにして、富みてその本能生活を完全に果し得るとき、人生はまことに明く且つ幸福にして歡喜の聲に

充さるべく、之に反して、貧しくしてその本能慾を制抑禁壓せらるゝときは、人生は暗くして不平不満の呪咀に閉され、不幸の妖魔に禍せらるべく、日本史が、その初めに當りてかくも赤裸々に此の事實を指摘し、以て今日に至る數千年の歴史を一貫して之を不斷に立證し來れることは、(よしその物語の筆者が意識して記述したるにせよ、無意識にしたゝめたるにせよ)實に偉大なる豫言を果したりといふべきであらう。「明き人生」——幸福の光は、「富」の鏡面に向つてつよく投射し來るべきことを、既にその遠き傳説の中に記し殘されたる「日本經濟史」は、かくてその第一頁より「人生」の解決に對して、人間それ自體が自然に享有する所の性慾と物慾との二つの本能を等閑視することを決して許されざるものとなつてゐるのである。即ち後世、日本經濟史社會史に現るゝ一切の現象は、悉く皆この二つの原始的絶對的本能に對する人間の闘争記録に外ならないのである。